

生活

seikatsu@asahi.com

「災害弱者」福祉施設が支援

岩手・宮城内陸地震 態勢づくり いま一步

避難所で介護は困難

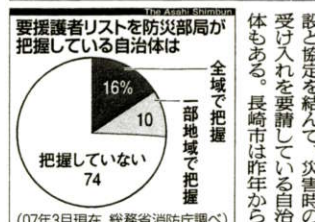
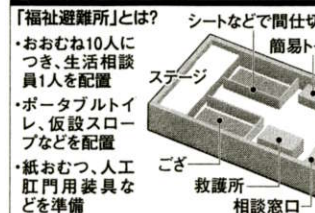
地震や洪水といった災害が起きたとき、高齢者や障害者の支援が課題になる。岩手・宮城内陸地震では、福祉施設が自主的に高齢者の受け入れに動いた。いざというときに備え、自治体や福祉施設が日頃から協議するよう政府は呼びかけているが、「災害弱者」に対する自治体の取り組みは十分進んでいない。(山田史古、山口智久)

激しい揺れで裏山が崩れ、土砂が自宅の20畳先まで迫ってきた。6月14日、宮城県栗原市の太宰英敏さん(76)と君江さん(66)夫妻は、夜は近くのコミュニティセンターに移るよう市から指示された。英敏さんは3年前の脳梗塞で左半身が不自由だ。自宅では食事とトイレは自分でできるが、寝起きや着替えに君江さんの助けが必要。避難所にはベッドがなく、トイレに行くのに介助がいる。「二人で介助するのは大変になる。君江さんは途方に暮れた。」「もしかしお困りではないですか。日頃から通所リハビリテーションを通じている近々の介護老人保健施設「高森ロマンホーム」から連絡を受け入れた。

高森ロマンホームの定員は100人。地震発生時、すでに定員いっぱいの利用者がいた。通常なら定員を超えてはならないが、被災者は特別で受け入れられる。ホームは東に確認しうえて、ケアマネジャーなどを通して避難生活で困っているような要介護者らに連絡。太宰さんを含め3人を、医師室などにベッドを置



施設から一時帰宅し、地震で崩れた裏山を見る太宰英敏さん(右)と妻の君江さん(左)＝宮城県栗原市東郷



副施設長の川嶋浩典さんは「地震で困る高齢者が出るだろうと予想していた。地震のすぐ後、ベッドなどを手配すれば定員に加えて10人までは受け入れられることを確認して態勢を整えた」と話す。

市内の特別養護老人ホーム「愛光園」も地震時は満床だったが、何人までなら受け入れられるかを協議し、ショートステイを3人まで止め可能と確認。道路の通行止めでもトイレサービスに通えなくなった人や、自宅での介護が難しくなった人が利用している。事務長の芳賀幸幸さんは「おむつ交換も避難所では難しい。避難生活が長引けば、今後さらに利用を希望する被災者が増える」とみている。

栗原市は、災害時に避難支援が必要な高齢者や障害者ら1630人を「要援護者名簿」にまとめた。それをもとに民生委員らが地震直後に呼びかける。

山梨県南アルプス市が訓練で体育館に設けた福祉避難所

援護者の把握進まず

「災害弱者」が孤立しないように、政府は06年8月に「災害時要援護者の避難支援ガイドライン」をまとめた。介護が必要で高齢者、障害者、妊婦、乳幼児、外国人ら一要援護者の名簿作りを自治体に求めている。さらに、各対象者を、誰が、どのようにどこへ誘導するかを示した「避難支援計画」を作るように呼びかける。

また、避難所となることが多い学校の体育館では十分なケアができないため、特別養護老人ホームや障害者福祉施設と協定を結んで、災害時の受け入れを要請している自治体もある。長崎市は昨年からの呼びかけ。

しかし、07年3月末までに名簿を作り防災部局が要援護者を把握している自治体は26%、避難支援計画の作成は24%にとどまる。個人情報扱いに慎重で対策が遅れているのが主な理由だ。

「災害が発生してから、自治体の災害担当が福祉担当に問い合わせた情報をかき集めていては手遅れだ。個人情報の扱い方を含めて事前に協議しておけば、多くの命を救うことができることを理解してほしい」と訴えている。

「(8月30日～9月5日)などに体験利用できる。電気通信事業者協会は「事前に練習して、連絡方法に慣れてほしい」と呼びかける。目黒公郎・東大生産技術研究所教授(都市震災軽減工学)は「普段から『災害マネジメント』を高めることが大事」と話す。考え出した「目黒巻」(サイトから入手可)という紙は、時系列で事態を書き込み、イメージトレーニングができる。「まずは事前に家族で避難場所や連絡方法を話し合っておく。親類の家など『情報センター』を決めておく。夫婦必要です」(大和田武士)

安否確認サービスに慣れよう

災害、その時、家族や知人の安否を確認するには。宮城県栗原市に住む男性(65)は地震直後、山間部の親族に何度も電話したがつながらない。災害用伝言板サービスも使い方がわからなかった。安否確認は3日後、東京の姉がテレビニュースに映った避難所に親族がいるのを見つけた。連絡してきた。避難所につけられた。「携帯電話も持っていないから、とにかく無事よかった」別の男性(28)も実家の電話や父

母らの携帯電話につながらなかった。動機先の状態を確認しうえて、実家へ。その間、心配した友人らから安否を尋ねる携帯メールは次々と届いた。両親と顔をあわせた後、NTTの「災害用伝言板サービス」を使った。無事を知らせるメールを家族や知人に一斉に配信できる。「これは便利。事前に配信先の登録もできる」と話す。

今回の地震直後から宮城、岩手を中心に東北地方の固定電話、携帯電話の通話が規制された。電話が通じない時、頼りになるのが災害用の各種サービスだ。

NTTの「災害用伝言ダイヤル」(117)は全国の固定電話、携帯電話から利用できる。ダイヤル音、再生ができる。災害用ブロードバンド伝言板(Webメール)は、パソコンや携帯電話からサイト(htt://www.web117.jp)に接続する。携帯各社も「災害用伝言板」を運用している。iメニュ、EZwebなどのトップページから接続する。

後ろ向きの人生も

6月22日に71歳の誕生日を迎えました。こんな生きてしまいました。識者の方々が「前向きに、ポジティブに」と言うなかで、私は終生後ろ向き、マイナス思考で生きています。実年齢よりだいぶ老けて見られ、不器用・不細工

ひととき

「口べたの引つ込み思想で、人のなかに入っていくのが苦手です。唯一の気晴らしは、図書館から借りてきた本を眺むこと。でも三十数年前、交通事故で右目を失明し、左もかなり悪くなりました。『年なんて、なん

み進めませんが、10分ほどで目が疲れます。そして半年前から、事故で複雑骨折をした左の大腿骨が、午後になると、とてもだるく痛くなり、足をひきずるようになりました。今の世の中、『この年になつて、こんなことを始めました』『年なんて、なん

その、私はこんなに楽しんでいきます』というふうにいきたい文章が紙面に載ります。でも、大勢の中には私のような方がいらっしゃるのでは、71歳の誕生日の朝3時に目が覚めて書いてみました。

東京都練馬区 加藤 英美 主婦 71歳